

# 県南の中核都市として 新たな時代への躍動



▶野球場のオープニングセレモニー（県南部健康運動公園）



▲屋内多目的施設「あななんアリーナ」



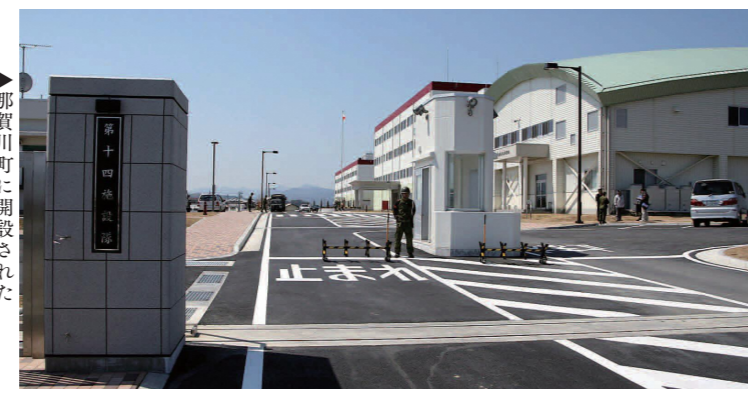
▲太龍寺道（二十三丁石付近）



▲東京ドームに飾られたLEDオブジェ



▶日本女性会議（男女共同参画）2013あなん



▶那賀川町に開設された陸上自衛隊徳島駐屯地（平成24年）

▼新ごみ処理施設「エコパークあなん」（橘町小勝）



▲4500人収容できる津乃峰地区防災公園



▲台風11号の大雨で氾濫した那賀川

## 地域資源を生かした まちづくりの推進

21世紀に入り、市民が主体的に活動するNPOやボランティア団体が注目されるようになり、地域資源を生かした市民と行政との協働による取組が、さまざまな形で実を結びます。その一つが、地域を代表する産業であるLEDを活用した「光」のまちづくりです。

平成14（2002）年12月、阿南青年会議所が行った牛岐城趾公園に3万個のLEDを使ったイベントがきっかけとなり、LEDオブジェが阿南の夏まつりやクリスマスイベントを彩り話題となりました。幻想的な光を放つLEDオブジェは、「光のまち阿南」の代名詞。東京や海外にも貸し出され、イベントの象徴として阿南市の知名度向上に大きな役割を果たしています。

地域資源を生かした取組は、スポーツの分野にも波及し、阿南市の新たな「顔」としてのブランド創出につながっています。

平成19年、徳島県南部健康運動公園内に本格的な野球場が完成したことを機に、地域で盛んな「野球」でまちおこしを進めようと、全国に先駆けて「野球のまち阿南」を宣言し、還暦野球大会や野球観光ツアーの開催、合宿の誘致を展開。開始から10年間で、宿泊者は延べ2万6千人にのぼり、経済効果は10億円を超えるという推計されています。

また、歴史の道を舞台にした取組でも、大きな成果を残しています。

その柱の一つが、災害に強いまちづくりです。東日本大震災を機に、地震・津波への防災対策を根本から見直し、防災公園の整備や公共施設等の耐震化を推進。平成26年の台風11号で大規模な洪水被害が発生した加茂谷地域では、平成28年に深瀬地区の堤防工事が完成し、現在は、加茂地区で築堤工事が進められています。

我が国の人口は、平成20年の1億2千808万人をピークに減少に転じ、本格的な人口減少・少子高齢化時代に突入しました。平成26年に発表された、日本創生会議のいわゆる「増田レポート」をきっかけとして、人口減少社会への対応が強く求められるようになり、生き残りをかけた地方創生の取組へとつながっていきます。

また、平成24年3月には、十数年にわたって誘致を進めてきた「陸上自衛隊徳島駐屯地」が那賀川町に開設され、「第14施設隊」を主力とする約200人の部隊が編成されました。災害派遣や民生協力活動でも広く活躍する自衛隊は、大規模災害に備える阿南市にとって、心強い存在となっています。

一方、医師不足などを原因とした地域医療の崩壊を防ぎ、将来にわたって安心して医療サービスが受けられる医療環境を整えるため、阿南市医師会、JA徳島厚生連、阿南市の三者による基本合意のもと、JA徳島厚生連が運営する新病院「阿南医療センター」の開院に



▲平成29年3月に完成した市役所新庁舎

向けて、現在、建設工事が進められています。

また、県南の1市4町による定住自立圏の形成や高知県安芸市、室戸市との県境を越えた連携のほか、県内外の企業や大学と連携した人口定住や地域活性化などの取組も積極的に展開し、産学官連携ネットワークはさらに広がっています。

## 新たな時代への躍動

昭和から平成にかけて激動の時代を支え、見守り続けてきた市役所庁舎に別れを告げ、阿南市は、平成29年3月に完成した新庁舎とともに新たな歴史の一步を踏み出しました。

そして、近い未来に目を向けてみると、阿南医療センターの開院や阿南道路4車線化による辰巳工業団地の企業振興、四国横断自動車の開通による高速交通時代の到来など、阿南市の可能性を開花させるための要素がたくさん見えてきます。その一つ一つを花咲かせ、県南の中核都市として、阿南市はさらなる成長と発展を続けます。